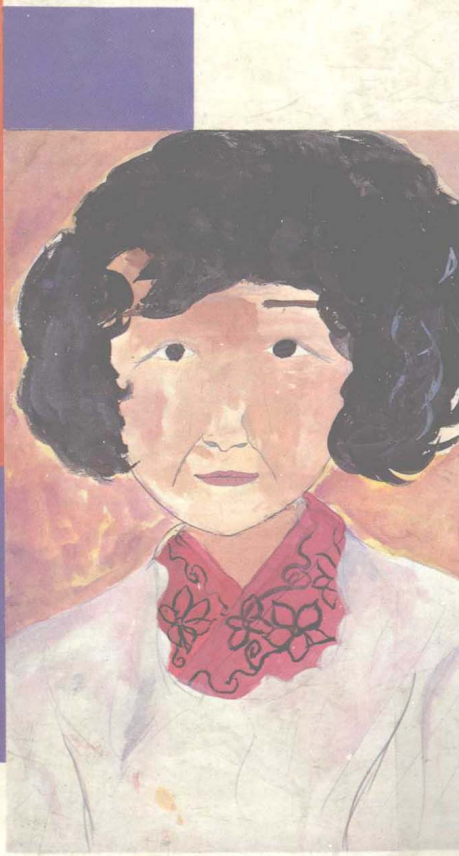
LIVE BOOKS

満点ママ 減点ママ

母と子のいる風景

藤本義一



LIVE BOOKS

満点ママ減点

母と子のいる風景

藤本義一

満点ママ減点ママ

著　者　藤本義一

編集責任者　桜田　満

発行人　古岡　滉

発行所　株式会社　学習研究社

東京都大田区上池台四―四〇―五　〒一四五
電話東京(〇三)七二〇―一一一一(大代表)
振替　東京八―一四二九三〇

印刷所　壮光舎印刷株式会社
株式会社　美術版画社

*この本の内容、製本に関するお問い合わせは、左記あてお願いします。
文書は、東京都大田区上池台四丁目四〇番五号
(〒一四五)学研ユーザー・サービス部
「満点ママ減点ママ」係
電話は、東京(〇三)七二〇―一一一一(大代表)

定価はカバーに明記してあります。

© Giichi Fujimoto 1978, Printed in Japan
無断複写複製を禁ず

まえがき

私は月に一回か二回、録音機（デンスケ）を肩にして、近畿を中心にした小学校をまわる。時には中学校に足を向けることもあるが、主に小学校である。

私は、彼等の心の中にある宝石を、マイクから掬（すく）い上げようとする。

ひとつは放送の仕事、もうひとつは、私個人の興味からである。

子供は小さな大人だという言葉がある。

子供は小さな哲学者だという言葉もある。

私は、子供一人一人の歓びや悲しみを回転するリールの中におさめながら、子供たちは、小さな大人であると同時に、小さな哲学者であると感じるが、なによりも、偉大なる詩人だと思う。

到底、大人の心では謳（うた）いきれない純粋な詩を、彼等は謳い上げてくれるのである。

そして、この小さな偉大なる詩人たちは、時には面白い言葉をやりとりするものである。

親という漢字を初めて習った時、一人の子供がいった。

「親というのは、木の上に立って見ている人やなあ」

と。

なるほど、親という字を分解して三つに分けると、立、木、見、となる。
この言葉をうけたもう一人の子供が、すかさずいったのだ。
「そうや。そうやのに、親は時々木から降りて来て、ぼくらは迷惑するわァ」
と。
子供の生活、思考、行動に、親が少し干渉しすぎるのではないかというのである。子供たちは干渉という言葉を知らないけれども、ユニークな発想で漢字を分解して、自己主張をするのである。
彼等には、はっきりとした自己主張があるのだ。大人たち、親たちは、それをともすれば見失いがちになる。
私は、この偉大なる詩人たちから拾い集めた話を、これから披瀝(ひれき)していこうと思う。
小説としてお読みいただいても結構だし、随筆風に受けとってもらってもいいし、またノン・フィクションのひとつとして受けとってもらってもいいと思う。
さまざまの場所で、さまざまの母と子に会った。つくづく感じたことは、母ニナルコトハ易シイが、母デアルコトハ難シイということであった。母親を継続するのは大事業であると思う。父親の比ではない。
子供の第一反抗期、第二反抗期は両親共にひとつの波をくぐることになるが、母と子の絆(きずな)が、強くなるか弱くなるかはこの時期に決定されるように実感をもった。父親は生き方を示し、母親は生き方プラス生活を子供に明確に示さなければいけないのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なあと感じたものだった。

最近、ラジオの取材で、小、中学生の自殺を調べてみたのだが、父の生き方、母の生き方と生活感覚が子供に大きな影響を与えているのを知った。それは、殆どが、子供と両親の対話を種にして芽生えていくようである。

さて、二十一章にわたって、私は、実際に出会ったお母さんと子供のエピソードを綴ってみた。小説ではないので、なるべく形容詞を避け、ストレートな日常の動きの中で母と子をとらえようとした。書く側としての意見も挟み込んで進行させてみたのだが、それもあまり深く切り込もうとしなかったのは、読んで下さる方に、それぞれの意見をもってもらおうとしたからである。

ついでに、それぞれのお母さんを、私は10点満点で採点してみようと思ったが、どうも0点以下の母親像もあるので、プラス10点とマイナス10点の0を原点としての20点の幅をもってした方が、私の、一番わかり易い採点であると思った。

ここで申し添えておきたいことは、私は一人の父親、二人の子供の父として、四十歳以前の目で見たことを、四十歳を過ぎてから書いたということである。この男の視点を読んで下さる方は、念頭においてもらいたいと思う。私はお母さんたちの意見を聞きたいのは勿論だが、お父さんたちの意見も聞きたい。

藤本　義一

小社発行の雑誌『ベルママン』に連載した「お母さんの季節」を改題したものです。

目次

第一話　夕焼けの詩 …… 9
第二話　八歳の抵抗 …… 25
第三話　青いガラスの目 …… 42
第四話　順教尼さんのこと …… 59
第五話　点字の童話 …… 75
第六話　首を捜す記 …… 92
第七話　超親馬鹿ママ …… 109
第八話　手も心も届かない世界 …… 127
第九話　間違った出発 …… 144
第十話　殺人罪の母 …… 161
第十一話　子どもを守りきれない母 …… 178
第十二話　歩め、アユミ君 …… 196
第十三話　裸の代理母 …… 212

第十四話　親不孝・親不行 228
第十五話　虹の橋を渡ろう 245
第十六話　奇妙な母親 262
第十七話　親の生きざま 278
第十八話　母さんのパスポート 294
第十九話　手づくり童話 310
第二十話　母と子のドラマ 327
第二十一話　妻でない母 343

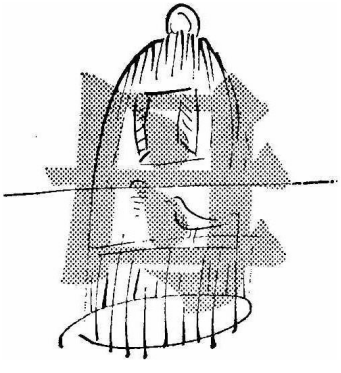
満点ママ減点ママ

――母と子のいる風景――

装幀　玉井ヒロテル
本文カット　渡辺藤一
表紙絵　野田由美意（五歳）
広田靖子（九歳）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一話
夕焼けの詩



一

九月の新学期の始まったばかりの朝、大阪市内のN小学校の四年クラスで、夏休みの思い出という発表会があった。

黒板には、

――夏休みの思い出話発表会。

と書かれていた。

テレビの歌番組のように、黒板に向かって左手に、椅子が三つ並べられ、そこが審査員の席になっていた。

二十九歳の西岡先生が、真ん中に座り、その両側に、男女一人ずつが座り、発表の点数をつけるわけである。

点数は、教室の拍手の大きさと、拍手した人数、そして、拍手していた時間の長さで決定される、と先生は発表会の前に審査基準を発表したのだった。

「どうやった、夏休みは、楽しかったか」

胸板の厚い西岡先生が、スポーツシャツの胸をぐっと突き出して話しかけると、

「ハーイ」

と、四年生たちは答えた。中には、ウォーイと奇声を発した何人かがいた。その奇声の主は、明らかに、私が録音しているのを意識した声である。どこの学校に行っても、外部からの闖入者が教室に現れると、三人から五人が、その闖入者に向かって意識的な音声を放つものである。このときのウォーイも、そんな子供たちだった。

「では、一番、思い出にある話を一人ずつやっていこう。人数が多いから、短くやろうや。うまく話にまとめられるかどうかだからな、いいな」

「ハーイ！」

といった具合に、発表会は始まったのだった。

さまざまな思い出が子供たちの口から飛び出してきた。

おもに、旅行の話だった。ハワイ、グアム島、アラスカに行ったのが、一人ずついたが、その他は、お母さんの故郷に行ったり、お父さんの故郷に行って来た思い出が多かった。

都会生まれの都会育ちの彼等に、田舎での何日間は、自然環境との融け合いがとても楽しかったらしく、魚釣りや蟬の誕生などがとくにもの珍しいようだった。

なかには、いくつか傑作があった。

「ぼく、びっくりしたんや。女の人が立ち小便してたんや。おばあちゃんやったけどもな、こういうふうにして……」

彼は、足をひろげて立ち、前跼みの姿勢をとり、絶大な拍手を得たものの、女生徒から反論をくらって、減点されてしまった。

「真相やのになあ、真相やのになあ」

彼は残念がって、こんな言葉を繰り返していた。どうやら、四年生の彼には「事実」を、「真相」という傾向があるらしいとわかった。

「うちは、妹とお母ちゃんとお父ちゃんとで高野山に行きました。高野山は、とても朝晩が寒かったのですが、はじめての朝、六時頃に、ブッポウソウの鳴き声が聞こえてきましたので、

妹のヨッちゃんを起こして、まだ寝ているお父ちゃんとお母ちゃんには内緒で、声のするほうに足音を忍ばせて行きました。背の高い杉の木が何十本、何百本と立っていて、朝靄が煙みたいで……」

この女の子は、なかなか表現が豊かで、淡々とした話しぶりだが、聞いている連中に固唾を呑ませたものだった。教室中がしーんとなった。

「ここや！　と妹がいうたので、杉の木の上のほうを見ると、拡声器が針金で結びつけられてたんです」

わっと子供たちの拍手が湧いたのだった。

つまり、宿坊か管理事務所かで、エンドレスの仏法僧の声が回転していて、彼女は騙されたというのである。

「なーんや」

という声や舌打ちや、うまく話に乗せられたという嘆声が、暫く教室の中に渦巻いていた。

中には、私のほうに向かって、指でOKサインをつくり、グーと桂三枝の真似をするのもいた。子供が流行語を素早く自分たちのものにするのは、大人よりも大体六か月は早いのだ。三枝の真似をした男の子は、私に向かって、今の話が今日の白眉の一編であるといっているのだ。

確かに語り口もよかったし、結末は現代の状況を描いてもいて、面白かった。

彼女が今日の一番かと、私自身も思っていた目の前に、小柄な丸刈りの男の子が飛び出して来た。

上衣は衿の大きな半袖で、肩のところに繕いが見えたが、洗濯したてであった。

彼は、上気した顔で、丸い目をきょろきょろさせ、何回も丸刈り頭を撫でるのだった。

すると、困惑している彼に向かって、あっち、こっちから、

「トオル！　トオル！　トオル！」

の連呼が起こった。

私は、この掛け声が、彼の人気度を示すものか、それとも、揶揄いかわからなかった。

トオル！　の掛け声は、

「サッサ、サッサ」

と、変化した。

どこかで耳にした言葉だと考えると、その掛け声はテレビの洗剤のコマーシャルで、CMをやっている落語家の林家小染に、トオルはよく似ているのだった。

「え……」

トオルは、やや凸凹の頭を撫でながら、顔を真っ赤にして、唇をとがらせて、喋りはじめたのだった。

「えー、ぼくは、夏休み中、どっこにも行ってませんねん」

二

坂口徹の父は、徹が三年になった春先に死亡した。事故死である。轢き逃げに遭った。父親は三十九歳だった。勤めていたプラスチックの町工場が倒産して、父は失業保険を得ながら、次の職場を探していたのだが、これといった技術があるわけでもなく、不況の兆しの見えはじめた昭和四十九年だから、就職するのが難しかった。

事故は、雨の日の午後六時過ぎに、夕凪橋近くの国道で起こったのだ。中型のトラックにはねられ、傘は真ん中から折れ、父親は頭蓋骨を骨折して即死だった。

失業保険証から被害者の住所、氏名はすぐにわかり、事故が発生してから一時間後に、徹と母親は報せをうけた。

母は、夕食のカレーを煮ていて、徹は、算数の宿題をしていた。

玄関口で、低い男の人の声がしているなあと思っていると、母が厳しい面持ちで、奥の間にはいってきた。

「徹、すぐに服を着替えなさい」

といいながら、母は割烹着を脱いだ。いつもなら簡単に脱げるはずの割烹着が容易に脱げな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com